

駒崎 勉先生を偲んで

藤田主一（日本体育大学）

日本応用心理学会名誉会員の駒崎 勉先生が、平成 27 年 2 月 28 日にご逝去されました。享年 84（満 83 歳）でした。駒崎先生から御恩を受けた私にとりまして、奥様からご連絡いただいたときは大きな衝撃で言葉も出ませんでした。私が大学院を修了した後の進路を考えていたころ、駒崎先生が勤務されていた城西大学で新学部を創ることになり、心理学の専任教員として就任してはどうかというお誘いがありました。昭和 57 年のことです。新学部設置との関係があり、先生はしばらくの間、それまで所属されていた経済学部から異動されましたので、完成年度までの間は今まで以上に公私とも身近でご指導いただきました。当時日本大学教授の大村政男先生は、駒崎先生（愛称：駒さん）について「駒さんは優秀な人だよ」と言っておられました。とても努力家で自ら研鑽を重ね、しかも心理学に対して博学多識な人であるということです。



駒崎 勉先生

駒崎先生の著書・論文のほとんどは単著です。人間理解の全体像をつかむためには、他者が研究した断片的な知識を寄せ集めても説明できないという思いからでしょう。もちろん専門的な書籍もそうですが、私は特に『随想竹声帖』という書物が好きです。1～2 頁の短編に四季折々の風情や人情、昨今の日常、旅の話、世相などが描かれ、読む人に温かな心をわき立たせます。先生の卓越した筆力が魅力となり、先生のとりこになってしまうのです。「生きた心理学」、それが先生の口癖でした。研究活動も非常に旺盛で、専攻されていたパーソナリティ関係だけでなく、城西歯科大学（現：明海大学歯学部）の歯科医師との共同研究を主導し、歯科医療における心理学の役割に取り組みされました。その成果は歯学関係の学会で発表され、全国の関係機関で講演を頼まれていました。医療心理学は、まさに応用心理学そのものです。

平成 5 年 7 月 8 日、先生はご自宅で倒れられました。脳内出血が原因です。随分とご無理をなされていたのだらうと思わざるを得ません。ちょうど日本応用心理学会からの要請を受け、駒崎先生を準備委員長として、平成 6 年 9 月に城西大学で第 61 回大会をお引き受けることになっていましたので、その準備が本格的に始まったころでした。駒崎先生の病氣療養のこともあり、さてどうしたものかと思案を重ね、準備副委員長の岡村一成先生が実質的に運営し、私が事務局長として支えることになりました。大会当日は退院されていた駒崎先生も車いすで参加され大会は大盛会でした。先生を中央に参加者の集合写真を撮影し、大会発表論文集に掲載したのもよい思い出です。

このたび、追悼文を捧げるにあたり、駒崎先生の奥様、ご子息様からご丁寧なお手紙を頂戴いたしました。その一端を紹介させていただきたいと思います。病氣になられる前の駒崎先生は、食べること、飲むことがとても好きで、レストランでの食後は決まってチェリーブランデーをゆっくり味わっていました。料理を作ること、野菜の苗を育てることも好きでした。学生をかわいがり、よく自宅へ招いてご馳走していました。専門の心理学のほかにも多くの関心を示され、落語、ジャズ、クラシック、旅行、野菜作り、野球観戦など幅広い行動力にあふれています。都内のコンサートにもしばしば出かけられました。なかでも鉄道と路線バスの旅が好きで、青函連絡船に周航する全船に乗船されたというエピソードがあります。

平成6年3月に退院し、自宅での生活が始まりました。平成7年3月に城西大学を退職されましたが、退院後の2年間は週3回、入院していた医療機関でPT, OT, STの訓練を受け、その後は自宅近くの医療機関のリハビリテーションに週2回、休むことなく20年あまり通い続け、また失語症の訓練のためコーラス教室へ13年も通いました。駒崎先生らしいと思われるのは、自宅生活を始めた当初に「これからも普通の生活がしたい」と宣言されたことでした。毎日入浴、三度の食事、夕食時の晩酌、冠婚葬祭の出席、旅行、外食、音楽や美術鑑賞など、多彩な日々を送られました。右手が不自由でしたが、平成18年から「左手による書と写真展」を始め、平成24年まで8回の個展を開かれています。重度障害の御身ではありましたが、奥様、ご子息様、お孫様からの愛情に支えられて、駒崎先生は幸せな人生を送られたと思います。

私が城西大学に奉職しているとき、とてもよくしてくださいました。共同研究はもとより、いろいろ相談にのっていただくことも多く、今は大きな支えを失った気持です。悲しくてなりません。駒崎先生の御恩に心から感謝申し上げるとともに、謹んで哀悼の意を表します。 合掌

■略歴

- 1931年5月15日 横浜市に生まれる
- 1957年 日本大学大学院文学研究科（心理学専攻）修士課程修了
- 1957年 富士短期大学専任教員（1976年より兼任）
- 1974年 城西歯科大学兼任講師
- 1976年 城西大学教授
- 1984年 日本大学兼任講師
- 1995年 城西大学・日本大学退職

■日本応用心理学会での活動

- 1978年 日本応用心理学会運営委員（現理事）
- 1991年 日本応用心理学会認定「応用心理士」資格認定検討委員会委員
- 1993年 日本応用心理学会常任運営委員（現常任理事）・副会長
- 1994年 日本応用心理学会第61回大会準備委員長・会長
- 2001年 日本応用心理学会名誉会員

■主要著書

- 1967年 『人間生活の心理学』 富士短期大学出版部
- 1977年 『パーソナリティの心理学』 八千代出版
- 1981年 『随想竹声帖』 富士短期大学出版部
- 1985年 『新訂パーソナリティの心理学』 八千代出版
- 1991年 『歯科衛生士教本心理学』（共著）医歯薬出版
- 1992年 『人間研究の心理学—パーソナリティの問題を中心に—』 八千代出版

■主要論文

- 1954年 賞罰と学習—特に診断性向性別集団において— 教育心理学研究, 4, 41-45.
- 1979年 パーソナリティテストとしてのSCTに関する一考察：特にその応用と解釈をめぐって 城西人文研究, 6, 15-27.
- 1981年 住居構想・形態と住居者のパーソナリティとの関係：特にYG検査、MASなどとの関連について 城西大学研究年報, 5, 91-113.
- 1988年 日本における大学生の生活行動と意識構造：特に専攻系列別比較を中心として 城西大学研究年報（人文・社会科学編）, 12, 1-35.
- 1990年 歯科における心理検査の応用について—SCT-Dの理論的枠組み— 日本歯科医療管理学会雑誌, 25(1), 14-21.